

先日、十一月二十三日は勤労感謝の日でした。昭和二十三年に制定された「国民の祝日に関する法律」によって定められ、「勤労をたつとび、生産を祝い、国民たがいに感謝しあう」ことを目的としています。

以前は「新嘗祭」という名称で、明治六年に国民の祝日に制定されました。新嘗祭は、その年に取れた新穀を天皇が神にささげて収穫を感謝する祭祀で、現在も受け継がれています。

新嘗祭の歴史は古く、諸説ありますが、日本の神話が記されている『古事記』や、『日本書紀』にもその記述があります。新嘗祭は古くより歴代天皇から受け継がれてきた数ある祭祀のなかでも最も重要とされる儀式で、伝統的な日本文化のひとつといえるでしょう。

「伝統」とは、「歴史的に形成された思想・技芸・風習などの系統を受けつたえていること」を意味します。

私たちの日常生活に目を向けてみると、家、会社、地域等、様々な所に「伝統」が存在します。

昨今は当たり前のように捉えていた家族や会社に対する価値観やあり方が大きく変わってきています。これまで行なわれてきた仕事の形を変えて対応していかなければいけないこともあるでしょう。

その際、変えていくものと、変えずに残していくものを見極めることが肝要です。

倫理研究所前理事長の故・丸山竹秋は、「伝統」について次のように述べています。



伝統を紡いできた 先人に思いを馳せる

「昔からのしきたりの中には悪いものもあるが、よいものもたくさんあるので、生命のもとである親祖先を敬愛する心をもって、それらに接するのが正しい。(中略)長い間かかって定着したよさがあり意義があるのだから、こうした形式の表面だけ見ることのないようにしたい」

(『あなたは生命の元を見つけたか』新世書房)

伝統は、長い時間、時代の中で必要な部分や変えるべきものがそぎ落とされ、磨かれ、より洗練された形で現在に残されてきたといってもよいでしょう。

本当に不要なものであれば、どこかの時点、タイミングで受け継がれてこなかったはずです。そこには、「この文化を後世に残していったほうが良い」という先人の願いや祈りが込められているのです。

「伝統」を「古くさい」「時代錯誤」だと一蹴する前に、まずは先人の思いに意識を向けてみましょう。次に調査を入念に行ない、議論を重ねた上で、改めるべき内容は毅然と変えていくという順序が肝要です。

新嘗祭で神にささげる新穀、その中でも特に日本人にとって大切な米を作る「稲」は、「いのちの根」という意味があるといわれます。米だけでなく様々ないのちのものをいただくいて、私達は生かされています。

食べ物が豊富にある環境で生活している日本人は、脈々と受け継がれてきた伝統や祝日に込められた先人の思いを受けとめ、いま、生活や食事が出来ることへの感謝を深め、日々、喜んで働きたいものです。